小説と読者

教養部助教授　宇佐見太市

わたしの母は長い小説を読むとき、こういうふうにやります。まず、はじめの二十ページを読み、それからおしまいを読み、それからまんなかへんをめくってみます。そこで、はじめてほんとに本を読みにかかり、はじめから終わりまで読みとおします。なぜそんなことをするんでしょう！母は、その小説がどういうふうに終わるかということを知らないうちは、安心して読むことができないのです。そうでないと、おちつかないのです。……

それはつまり、クリスマスの二週間もまえに、どんな贈り物がもらえるかを知ろうとして、おかあさんの戸だなの中をかきまわして見るようなものです。贈り物をもらうために呼ばれるときは、みなさんにはもうすっかりわかっているわけです。それはあさましいことじゃありませんか。みなさんはさも驚いたようなふうをしなければなりません。しかも、じっさいは、何をもらうのかとっくに知っているのです。（エーリヒ・ケストナー、『点子ちゃんとアントン』　高橋健二訳、岩波書店）

著名なドイツの児童文学者エーリヒ・ケストナーが、自分の母親の本の読み方について語った文章である。ケストナーに戒められるまでもなく、私たちはこのような読み方が邪道であることは当然心得ている。しかし同時に、誰しもこんな読み方をしてみたいという誘惑にかられたことはしばしばあるだろう。小説を読む時、必ず解説を読んでから次にその作品を読み始める読者がいるが、そういう人々もケストナーのお母さんと近いタイプの読者と言える。

しかし、考えてみれば書物の読み方にこれといったきまりがあるわけではなく、どんな内容の本を読むかという好みが千差万別である如く、本の読み方についてもさまざまな流儀があってしかるべきかもしれぬ。

例えば漱石の『草枕』の主人公の画工（えかき）は、本を「御籤（おみくじ）を引くように、ぱっと開けて、開いた所を、漫然と読んでるのが面白い」、といった実に極端な読み方をする。そしてその読み方を見咎めた下宿先の娘、那美さんにしつこくからまれるのである。那美さんが、小説を「初めから讀んぢや、どうして悪い」と詰問してくるのに対し、画工は「初めから讀まなけりやならないとすると、仕舞ひ迄讀まなけりやならない譯に」なるからだ、といういささか禅問答めいた返答を返す。那美さんにとって、画工の答えは「妙な理窟」に過ぎない。

「妙な理窟だ事。仕舞迄讀んだつていゝぢやありませんか」

「無論わるくは、ありませんよ。筋を讀む気なら、わたしだつて、左（さ）様します」

「筋を讀まなけりや何を讀むんです。筋の外に何か讀むものがありますか」

那美さんという女性はなかなか才走った負けん気の女であるから、彼女の、この最後の嘯きは必ずしも彼女の本音ではなく、単に相手の揚げ足を取っているだけかもしれないが、それでもこの二人の読書観を対比させてみると、前田愛氏の言う通り、「小説から筋だけを性急に読みとろうとする大衆的読者とそうした段階を超越したエリートの読者との対立図式」（『文学テクスト入門』、筑摩書房）が浮かび上がってくるだろう。確かに、その知性、教養、趣味の程度によって、読者というものは峻別されるべきものなのかもしれぬ。しかし、たとえ筋だけを追っているように見えても、その書物の内容にひき込まれ、のめり込み、書物の世界の中に身を浸すことのできる読者ならば、そういう人々を一概に「大衆的読者」と決めつけるわけにはいくまい。『草枕』の画工のような読み方をしていて実際に私たちは

どれほど書物を楽しめるものだろうか。再び前田愛氏の言葉を借りれば、「読者をかりたてるもっとも素朴な力は、『草枕』の那美さんが洩らしているように、プロットないしはストーリイへの興味と関心」だからである。

ケストナーのお母さんの奇妙な本の読み方も、考えてみれば彼女が物語の世界にのめり込みすぎるあまり物語の内容や結末如何によっては苦痛を感じざるを得ず、それが怖さにとっているやむを得ざる防衛手段だと解釈することができる。即ちそれは、彼女がそれだけやすやすと虚構の世界の中へ自己を没入できる読者だという証左に外ならぬのである。

感情移入とか共感とかいう言葉は、われわれにとってもはや幼稚な不充分な言葉にしかすぎなくなった。しかし物語を愛するわれわれがその愛する所以を問われたとき、われわれがまずよすがとするのは、それらの未熟な言葉なのである。昨今大はやりのミヒャエル・エンデの代表作『はてしない物語』の中に、バスチアン・バルタザール・ブックスという少年が登場する。この少年は類を見ないほどの本好きの少年である。物語は、バスチアンが古本屋から一冊の本、『はてしない物語』を盗み出したことから始まる。

バスチアン少年が得意とする唯一のことは、想像することであり、彼は「ほんとうに目に見、耳に聞こえるように、何かをはっきりと思い描くことができ」（上田真而子、佐藤真理子訳、岩波書店）る才を持っている。『はてしない物語』を読み進むうち、バスチアンは「太い幹がきしむ音や風が梢にざわめく音がほんとうに聞こえたばかりでなく、四人の奇妙な使節のそれぞれにちがう声を聞きわけさえした。それどころか、森の土や苔のにおいまで嗅いだような気がした」。このバスチアンのような読者をこそ、われわれは最も幸福な読者と思わざるを得ない。やがてバスチアンはこの才能ゆえに実際に物語の世界、「ファンタージエン」の中に足を踏み入れることができ、現実の世界と架空の世界とを行き来できる数少ない選ばれた人間の一人となるのである。ここで留意したいのは、バスチアンがどのような方法で虚構の世界の中へ導かれていくかという問題である。

架空の世界「ファンタージエン」は、今危機に頻している。「ファンタージエン」を救うためには、その世界を統べる女王「幼ごころの君」の病を直さなければならない。そしてバスチアンこそは、唯一人、その救い主となるべき運命を荷わされた人間なのである。しかしバスチアンと幼ごころの君は、現実の世界と虚構の世界を隔てる壁によって、厳然と隔てられている。そこで幼ごころの君はどのような手段を用いてバスチアンを自らの世界に招きよせたのか。彼女は「ファンタージエン」の少年アトレーユを探索の旅に遣わし、その物語を読むバスチアンに彼の冒険を共に味わわせることによってバスチアンを「ファンタージエン」に招きよせたのである。探索の旅を終えたアトレーユに向かって、幼ごころの君は次のように言う。

「……そなたを大いなる探索に出したのは、そなたが今報告するつもりだった報せのためではなく、それがわたくしたちの救い手を呼ぶ唯一の方法だったからです。かれはそなたのしてきたことを共に体験し、そなたと共に遠い道程をやってきました。……」

幼ごころの君の用いたのは、われわれにはおなじみの「感情移入」、「共感」、或いは作中人物との「一体化」、という方法であった。「現実」と「虚構」の二つの世界をつなぎ、その双方に生命と活力を与え得る人間は、エンデによれば、バスチアンの如き強烈な感情移入によって物語の中に生きることのできる読者のことだったのである。

しかしながら、例えばウラジミール・ナボ

コフは、「読者がなしうる最悪のこと」は、「作品中のある人物と一体になったような気持になること」(『ヨーロッパ文学講義』、野島秀勝訳、TBSブリタニカ)だと言う。ナボコフにとってすぐれた文学作品は至上の芸術作品なのであり、読者たるわれわれはあくまでもそれを味わう、という姿勢をくずしてはならないのである。もっとも、ナボコフ流の味わい方というのは、「熱烈に味わい、涙し、おののきながら味わいつく」す、という実に派手なものであるけれども。

われわれ現代の読者は、はたしてどのような読書法を信条として掲げるべきなのだろうか。昔ながらの「感情移入」方式か。それとも、「自分の想像力を抑える時と場所とを心得」た、ナボコフ式の読書法か。ともあれ、何より肝心なのは、書物に対する愛情であろうし、いかに次元の低い楽しみ方をしている読者にせよ、或いはどんな奇抜な読み方をしている人々にせよ、全く本を読まない人間に比べれば、彼らははるかにゆたかな世界をその魂に内包している、と言うことができよう。

書物を愛するのはすばらしいことである。しかし度を越すとそこにも問題が生じ、ついには怪談にまで発展する、というのは、次に紹介するイヴリン・ウォーの「ディケンズを愛した男」という不気味な短篇である。

裕福なイギリス人の青年ヘンティは、妻に裏切られたことから人生に絶望し、やけっぱちになってブラジル探検隊のメンバーに加わる。しかし不運続きの一行は、一人また一人と隊員を失っていき、遂にヘンティはアマゾンのジャングルに行き倒れることになる。そのヘンティを救ったのが、六十年以上もアマゾンの奥地に住みついている風変わりな老人マクマスターだった。深い森に囲まれたマクマスターの住居は、世間から全く隔離したところにあり、そこから出るためにはマクマスターの協力がぜひとも必要なのだ。しかし、体力回復したヘンティを、マクマスターはなかなか放してくれようとしない。老人はヘンティにディケンズの小説を朗読することを要請する。なぜなら老人は、ディケンズの熱烈な愛好家であり、同時に全く文字が読めないからである。

最初のうちこそ老人の無邪気な聞き手ぶりに喜んでせっせと朗読を続けていたヘンティだが、やがて彼は恐ろしい事実にうすうすと気づいていく。マクマスターは、貴重な読み手であるヘンティを金輪際手放すつもりはないのである。なんとか文明社会に帰ろうとするヘンティと、逃がすまいとする老人の間で、熾烈な知恵比べが展開される。一年近い月日が流れ、ヘンティはようやく外の世界と接触するチャンスを手にする。彼は助けを求め、そして救援隊が来ることを確信しながら、最後の晩餐のつもりでマクマスターと共に原住民たちの祭りにのぞむ。しかしその祭りで飲まされたピワリ酒がヘンティの意識を奪い、そして同時に彼が文明社会に帰る機会を永遠に奪ってしまったのである。目覚めて呆然としている彼に、狡猾な老人はささやく。救援隊が来るには来たが、老人がヘンティの時計を渡したら、それを遺品として喜んで持って帰ったということ、そして二度と彼らがこの地を訪れることはあるまい、ということも。

> 「さてさて、あんたに気分のよくなる薬を作ってあげよう」、と老人は悪魔のような満悦を見せながら言う。「きょうのところはディケンズはやめておこう……どうせ明日もあさっても、その次の日もある。『リトル・ドリット』を読み返してみようじゃないか。あの物語を聞くたびに、わしは泣けてくるんじゃよ」(長井裕美子訳、『真夜中の黒ミサ』ソノラマ文庫所収)

ヘンティはディケンズの朗読家として永遠に老人の奴隷にされたのである。